

IV カリキュラム化の視点

IV-1 学校のカリキュラムとしての活用にあたって

自然環境教育プログラムを学校で活用する際には、学習指導要領と整合性をとることや、学校の年間計画にあらかじめ位置づけを図ることなどが課題として挙げられた。

そこで、各プログラムの説明の中に「対象学年・教科・単元」の項目を設け、授業においてプログラムの活用が図りやすいように配慮した。各学校に対しては、この項目を参考にして、プログラムを反映させたカリキュラムを構築することを期待する。また、学校だけでプログラム活用を検討するのではなく、学校と関係機関が集まる「連絡会」の場を設けることで、来る年度の授業にプログラムをどう反映させるべきかを話し合う協働体制を築くこととしている。

以下は、プログラムの中で大きな比重を占める観察活動と制作活動を例にとって、各学年で体験してもらいたい内容を整理したものである。

学年	観察活動の趣旨	制作活動の趣旨
小学校 低学年	危険の少ない海岸や干潟を訪れ、そこに生息する生物の観察を行う。観察の仕方を教えたり、発見する喜びを体験させることが主眼である。	簡単な技術で制作でき、玩具など興味を持ちやすい題材を取り上げる。
小学校 中学年	時間の変化に着目して自然を体験する。昼と夜、季節によって自然は変化することを実際に確かめさせる。	
小学校 高学年	高学年になると、より高度な自然体験を行う。シュノーケリングでサンゴ礁礁原の様子と生き物を観察することも含まれる。	取り扱いが難しい材料や道具を使うことにも挑戦する。
中学校	西表の自然が山から海までが一つのつながった生態系であることを理解させる。また、優れた自然観察の手法であるカヤックやスキューバダイビングを用いて体験的に理解させる。	単なるモノづくりではなく、モノの背後にある文化や生活様式、社会情勢なども考えながら、制作体験させる。

IV－2 対象学年毎の分類

本カリキュラムを授業に活用する際の目安になるように、各プログラムを対象学年毎に分類した表を作成した。(表1参照)

IV－3 教科毎の分類

本カリキュラムを授業に活用する際の目安になるように、各プログラムを教科毎に分類した表を作成した。(表2参照)

IV－4 年間計画マトリックス表

本カリキュラムを授業に活用する際の目安になるように、各プログラムの対象学年や教科・単元、実施時期について、一覧で示した。(表3参照)